このトキは、君のために…

SSP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
このトキは、君のために…

【Ｎコード】
Ｎ４１５６Ｉ

【作者名】
ＳＳＰ

【あらすじ】
草守翠は幼い頃に母親を亡くした。その母が通っていた学校に通うのがいつしか翠の夢になっていた。念願だった「蜂城高等学院」（ほうじょうこうとうがくいん）に受かり、全寮制の学院に引っ越すことになったが、そこには翠が想像していた以上に過酷で苦しい生活が待っていた…
そんなとき翠はある人に恋をしてしまった。「絶対そんなことない！！」そう思ってたはずなのに…。その人は翠の心の支えになり、翠自身を温めてくれた。そんなところに惹かれていったのだった…。

翠の心が揺れ動く、そんな人に出会えたのだったが…

登場人物紹介

―登場人物―

野々宮（ノノミヤ）　翼（ツバサ）　（男）　特別科１６歳　高校１年カリスマ的存在。美形で女子にモテモテ

草守　翠（クサモリ　ミドリ）　（女）　１－Ａ　１６歳　高校１年。ものすごく天然

東　隼也（アズマ　ジュンヤ）　（男）　特別科１６歳　小さい頃から翼とは幼馴染。とてもかわいい系

桜城　優（サクラギ　ユウ）　（男）　特別科１６歳

→：　女の子が大好きなチャラ男。（↑遊びまくり…）

水波　玲奈（ミズナミ　レナ）　（女）　１－Ａ　１６歳

翠の小学からの親友。中学で別れたが高校で再会。

野々宮　輝（ノノミヤ　ヒカル）　（男）　特別科１６歳

翼の双子の弟。顔＝そっくり、性格＝正反対らしい…

―その他（脇役）の人物―

菊地（キクチ）　俊也（トシヤ）先生（男）　１－Ａ、特別科担任２６歳　結構若く見えるらしい…。以外とイケてる

草守　竜（クサモリ　リュウ）　（男）　１４歳、中２．　翠の弟。中１からのラブラブな彼女がいるらしい。

有宮（アリミヤ）　光輝（コウキ）　（男）　１－Ａ　１６歳　翼、隼也、優、輝と同じバスケ部。ムードメーカー的

如月　遥（キサラギ　ハルカ）　（女）　１－Ａ　１６歳　翼のことが大好きな女の子。翠が邪魔だと思ってる。

登場人物紹介（後書き）

初めて書いた小説です。
手違いがあるかと思いますが、
そこは大目に見てくださいｍ（＿＿）ｍ

まぁまぁ、がんばって書きますね＾＾
よろしくお願いします…

第一章　　・蜂城高等学院への期待・　　翠

私、草守翠はやっとのことでこの蜂城高等学院に入学できた。
お母さんが通っていたこの学院へ通うことが、
１番近い私の夢になっていた。
この学院はとてもレベルが高く、
学歴でもスポーツにおいても優秀な成績を収めてきた。
全寮制はつらいけど、私は頑張れる！！
そんな夢をかなえられたこの学院で、
３年間暮らせるかと思うとわくわくして仕方がない。

そんなことで明日から寮に泊まることになり
前から整理し始めていた荷物を昨日送り、
今は、小物をかばんに詰め込んでいるところ。
そして今日、朝の７時ころに家を出る予定。
今は６時半。竜が寝むそうに目をこすりながら起きてきた。

「姉ちゃん…おはよ…　　ふぁあ・・・」
「あっ、竜おはよう。」

あくびをしながら、挨拶してくれて…
そんな竜がかわいくて、つい笑ってしまった。

「なに、笑ってんだよ！？」
「いやぁ、べぇつにぃ」
「なんだよ、気色悪ぃな…　　ってか、今日行くの？？」
「うん。７時頃には家出ようかなって思って。」
「ふーん・・・。」

「なに??もしかして、さみしい??」
「んな訳ねぇだろ!!うるさい姉がいなくなって、むしろ嬉しいっつうの!!」

そんな会話をしているとあっという間に時間は過ぎていく。
竜は私が家を出る直前まで、「忘れものねぇのかよ」とか「夏休みって帰ってくんの??」とか、
なんとなく、なんとなくだけど心配してくれる。

「夏休みには帰ってこいよ。体に気をつけてな。」
「もー何回も言わなくたって分かってるって。」
「翠、母さんには挨拶してきたか??」
「あっ、忘れてた!!」

急いでお母さんの写真のまえまで行って「おかあさん、行ってきます。」といった。

「よし!!んじゃ、行ってきます。」

家族に挨拶して、私は家を出た。
蜂城高等学院への期待を胸に、私は一歩前を踏み出した。

私は毎日、携帯にその日あったことを書き込むのが日課になっていた。
ブログとかそういうのじゃなくて、ただ思い出として・・・。

―4月1日　AM7：00　蜂城高等学院の寮に行った。家族と離れるのは寂しいけれど
これから3年間がんばるぞー!!

第一章　　・はじめての出会い・　　翠

つ、着いた…。私の憧れだった蜂城高等学院に…。
思ってたよりずっと大きく、立派な学院だった。
大きな門があって、学院はほぼ金色に近いくらい…。
「でっか…！東京ドームくらいあるのかな…？」
そんなバカげたことを、ぶつぶつ言いながら学院から５００ｍくらい離れた寮に向かった。

「ねぇねぇ、君～。１人？俺たちとどっか行かない？」
背後から声を掛けられて振り向くと、ギャルって言うかチャラい感じの男の人が３人立っていた。
「え…っと…あの…これから学校なんです…。」
そう言って、逃げるつもり…だったのに…
「学校？っておいもしかしてこの子、この制服って蜂城高等学院の子じゃね？」
「まぢで！学校なんてサボればいいじゃん。」
そんな無責任なこと…
「ほーら。早くいこ？」
いきなり１人の男に手を握られて、振り払おうとしたけど女の私が男の人の力に勝てるはずもなく
握られてる腕は赤く変色してきた。
「嫌です。離して下さい！」
抵抗しても全く動じない。…その時！
「その子の手、離してあげてくれませんか？」
またもや、知らない男が３人立っている。なんなのよもう…
「あっ、なんだテメェら？」
さっきの３人は私たちのほうに近寄ってきて、手を握っている男の人の耳元で

「離せって言ってるのが聞こえねぇのかよ…。」
　って言った。すごく小さな小声だったけど、私にははっきりと聞こえた。
「ねぇねぇ、翼っ。この人たちボコるの？」
　かわいい美形の男の子が言ってるのに、なぜか複雑な気持ちになるのは気のせいだろうか…？
「隼也、口元笑ってるけど顔笑ってねーよ。ってか、そうするか。優？どうする？」
　＜翼＞らしき男の人は＜優＞らしき男の人の方を見てだるそうに言った。
「やめとけよ。入学する直前から大事になったらどーすんだよ。いきなり退学とになるかもしんねーの　に…。」
　3人は私なんかほったらかして意味不明な話をしている。あの…助けてくれるのであれば早く助けてい　ただきたいのですが…。って、私の手をつかんでいる男の人たちもなんか、呆然としているのですが…――…もう、いいや！
「あの、早く放してくれませんか！？」
　私はこの空気に耐え切れなくなって、思い切り大きな声を出した。
　イケメン3人組は私の方を見て、びっくりしたように目を見開いた。
　そして、翼らしき人が私の肩に手を置いて
「へぇ、度胸はあるんじゃん。」
　と、小さな声でそう言った。
　そして、いきなりでっかい声をあげて
「優、隼也！戦闘開始だ。」
「おう！」
「うぃー」
　と、戦闘開始してしまった…。
　そのあとの事はというと言うまでもない。3人とも暴れるだけ暴

れて、私を寮まで送ってくれた。
「ねぇ、翠チャンはなんで蜂城のあんな難しい試験受けたの？」
私の事を「翠チャン」と呼ぶこの男の子。東隼也くんはバスケの選手らしい。身長は１５８？と小さいけ　ど周りの人よりも動くスピードが速く、パスもすごくうまいらしい。
「おい、隼也。俺らだって受けてるだろ？そこまで難しくなかったし。」
隼也くんになぜかつっこんでるこの男の人。桜城優くんもバスケの選手。身長１７０？くらいかな？高い　身長をうまく使って、隼也くんのパスを見事にもらいシュートをする。ダンクが得意らしい。
「はぁ―。朝っぱらからだりぃ事したな。誰かさんのせいでさ…。」
この男、嫌味ったらしく言ってくるけど、自分から「戦闘開始だ」とか何とか言ってたくせに…。
「何？なんか言いたい事でも？」
口角を斜め上にあげて、自身満気に笑ってる。でも、この人カッコいいんだよね…。
私のタイプにもろ的中している。
この男、野々宮翼。この人もバスケのエース選手。身長１６８？。優くんよりも低いけど、全てがパーフ　ェクトな感じな人。
こんな人が自分の彼氏だったら…。なんて、ばかみたいな事を思ってみたりもする。
「うっ…すみませんでした。」
何となく謝らないといけないような気がして、一応謝っといた。
「分かればよろしい。」
野々宮翼はそういって、私の頭をポンポンと撫でてくれた。そして、
「まぁ、いい運動にはなったからいい…。」
野々宮翼はまた小声でそう呟いて、４人で一緒に学院へ向かった。

―４月１日　ＡＭ１０：３０　隼也くん、優くん、野々宮翼のイケメン３人に出会った。３人とも結構優しくてこれから頼りになるかも。

第一章　・再会した2人・　翠

あーぁ、3人とも捕まっちゃったな…。
私は3人をその場において、クラス分けの張り紙を見に行った。

この学園はA~ F組までの6組制となっているが、1組だけ男子専用クラス「SSP特別クラス」というもの　がある。その名の通り、特別な男子しか入れない。このクラスはお坊ちゃんのような家がとてもお金　持ちで、自分勝手な人が通ってるような学院だ。そのため、学院内では普通科のA~ F組の中で1人ずつ　世話係の女子を選ばなければならない。お坊ちゃんに選ばれてしまった女子は主人（選んだ男子）と　お揃いのネックレスをしなければならない。
世話係には山ほどの仕事がある。テスト前になれば主人の代わりとなり勉強したり、教えたりする。　また、買い物など、デパートに行った場合は荷物持ちなど…主人は世話係を「奴隷」と「主人」いう　ような関係でしか考えてはいない…。しかも、部屋も主人と一緒だからすごく大変！主人に対しての呼　び方も○○坊ちゃま、○○様など、目上の人に対する話し方をしなくてはいけないのだった。もちろん、　主人命令もしっかりと受ける。主人命令は「絶対約束」と、学院で校則として決まっているものだっ　た。この制度は主人が世話係のことを気に入らなかったらポイ捨てをしてもよい。しかしポイ捨てさ　れてしまったらこの学院にはもう居られなくなる＝退学をしなければならない。だから、世話係は捨　てられないように身を尽くして、主人の世話をする。だから、そのほかのペアの中には3日で捨てられ　る人もいれば、高校3年間ずっと一緒だということもあり得るということ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4156i/

このトキは、君のために…

2010年10月10日02時24分発行